しおさい

下北ジオパーク（北部海岸）

CONTENTS

●特集記事 シリーズ⑮ ふるさと見聞録：猿ヶ森（さるがもり）を訪ねて……2
●明日へのかけはし：東通村観光協会……4
●クローズアップ こんにちは元気さん：三國（みくに）　智紘（ちこう）さん……4
●ファイト!わんぱく：東通小学校女子バレーボール部……5
●地元の特派員レポート：大槻（おおつき）　夕凪（ゆな）さん／駒谷（こまたに）　純一（じゅんいち）さん……6

vol.16
平成29年度発行
東北電力（株）東通原子力発電所

特集記事 東通村29の集落の特徴的風物や人物を探る！

シリーズ⑮ ふるさと見聞録

大自然と資源に恵まれた集落！

猿ヶ森（さるがもり）を訪ねて

絆の強い地区、思いやりを持ち、一致団結して地域を守る！

下北半島の太平洋沿岸に広がる砂丘と、ヒバの埋没林で有名な集落が猿ヶ森地区です。

地区内には、大沼、左京沼、タテ沼など、大小十数の湖沼群が点在し、四季折々の自然の美しさを堪能できます。大沼近くの千軒台には以前繁栄した集落があったと伝えられています。今は面影もありませんが、戦前まで鳥居が残されていたそうです。

左京沼

東側には、昭和34年に防衛庁下北試験場（現・防衛装備庁下北試験場）ができ、射撃訓練が行われているため、人が自由に往来できませんが、総延長17km、幅約1～2kmとも言われる日本最大級の砂丘地帯があります。これは有名な鳥取砂丘を超える大きさです。

猿ヶ森地区は資源が豊富で、昭和18年から25年頃までは猿ヶ森のトヤ森付近に石炭鉱山がありました。今も坑道跡が残されているほか、地域の八幡宮には当時、炭鉱を営んでいた企業から大太鼓が奉納されています。

暮らしは半農半漁で、江戸時代には牛馬の飼育も盛んでした。大正時代は地引網漁が行われ、イワシ、タイ、タコなどが自家消費されていたようです。昭和24年には、猿ヶ森漁業協同組合が発足。港湾施設はありませんが、小型定置網でサケ、底建網ではソイ、アイナメ、カレイなどが、尻労、白糠、小田野沢漁港に水揚げされています。近年は、ヒラメやアワビの稚魚放流、コンブの種付など、作り育てる漁業にも力を注いでいます。内水面漁業では、猿ヶ森漁業研究会により、大沼、左京沼にウナギの稚魚が放流され、追跡調査も行われています。

猿ヶ森集落

集落では、部落会が八幡宮の春祭り、秋祭りを取り仕切っているほか、道路の清掃や刈り払いなども行っています。また、青年会は正月の門打ち、祭りでは祈祷舞を披露。大雨になると消防団第15分団は、地域を巡回して住民の暮らしを守っています。このほかにもさまざまな活動をしている団体があります。高齢女性による「ばば会」は、月に一度集まって会話を楽しんでいます。また、社会福祉協議会による「あずまる会」には、村内でも早くから積極的に参加し、健康増進に向け運動などを行っています。

小さい集落ですが、昭和の頃は冠婚葬祭も地区民総出で盛り上げていたそうで、今も地区の行事は団結して取り組み、もめ事のない、まとまりのある地域です。

八幡宮

奉納された大太鼓

地区役員
橋本（はしもと） 廣（ひろし）さん（81歳）

半農半漁の地区で、若い頃は定置網でサケを獲り、牛を10頭飼って繁殖を行い、田んぼと畑も耕していました。

今は妻と2人で、キャベツ、白菜、ナガイモ、ネギなど何でも作り、皆さんに差し上げるのが楽しみです。

猿ヶ森は、人がとても穏やかで、住みやすい良いところです。

太平洋に面した猿ヶ森砂丘

歴史的に貴重な「猿ヶ森のヒバ埋没林」

青森県自然環境保全地域に指定されている「猿ヶ森のヒバ埋没林」は、今から800年～1000年以前に埋没したヒバが、直立したまま砂に埋もれている様を見ることができる、貴重なスポットです。

かつて下北半島はヒバの大森林地帯でしたが、数千年前から断続的に海の砂が打ち上げられ、立ち枯れたヒバは砂に埋もれ、その一部が埋没林として姿をあらわしています。

昭和30年代初め、ワンダーフォーゲルで下北を訪れていた大学生が見つけ、世に広めたとも言われています。当時は今のように整備されず、ガレキのような埋没林の間では、猿ヶ森の子どもたちが、かくれんぼをして遊んでいました。

静寂の森を歩けば、松林の中の巨大な埋没林が不思議の世界へといざなってくれる、パワースポットです。

ヒバ埋没林

猿ヶ森地区　会長
杉本（すぎもと）　勇造（ゆうぞう）さん（68歳）

猿ヶ森地区は、世帯数18戸、人口約60人。勤め人と漁師の家がほとんどの小さい集落ですが、だからこそみんな仲良く、まとまりある、あったかい地域です。春祭り、秋祭りはもちろん、清掃奉仕も地区民総出で取り組みます。

しかし高齢者が多く、若い人が少ないのが現状です。地区の団体も次第に消滅し、長男であっても県外に就職してしまう中、若者の働く場の確保と定住促進を働きかけ、もっと集落を活気づけたいと思います。

元・地区　会長
川口（かわぐち）　潔（きよし）さん（80歳）

猿ヶ森には「薬師様」と呼ばれる湧き水があります。大雨でも乾季でも、いつも同じ水量なんです。伝説ではケガをした山兎が、湯治をして治ったとされています。今でも「腐らない水」と言われ、イカ漁で手に針を刺した漁師さんが水を持ち帰り、温めて手を洗うと一晩で治るそうです。

また山林など、地区共有の財産もあります。人数は少ないけれど心が豊かな地域です。

地区役員
橋本（はしもと）　喜一（きいち）さん（67歳）

地下資源に恵まれ、歴史的にも古い時代から人が暮らし、埋没林、砂丘、湖沼など、自然にも恵まれている素晴らしい地域です。

集落のシンボルとなっている「いちいの木」など、まだまだ知られていない良いものがたくさんあります。

先祖が築いてきた遺産を大切に守り、観光にも生かしていきたいと思います。

明日への かけはし

東通村の頑張るグループを紹介

豊かな自然を生かし、村の観光産業を創出!
[東通村観光協会]

東通村観光協会の皆さん

昨年、日本ジオパークネットワークへの加盟が認定されて誕生した「下北ジオパーク」。尻屋崎をはじめ、尻労、岩屋地区など、東通村の魅力あふれるジオサイトに、多くの観光客を呼び込もうと活動しているのが東通村観光協会です。

設立は平成2年。商工会、漁協、商店、宿泊施設、郷土芸能などに携わる、41名で構成されています。

これまで、自主事業として北限海峡釣り大会を開催したり、村内の団体と協力し村おこし地酒開発研究会を立ち上げて「能舞の郷」を作ったり、「21世紀観光づくりシンポジウム」や、「郷土芸能と食を楽しむ会」などの開催に尽力してきました。

イベントに向けた会議の様子

「下北ジオパーク」の認定をきっかけに、昨年から本格的にその普及活動も始めました。東通村観光協会の氣仙修会長は「東通村には、観光資源がたくさんある。しかし残念ながら観光を生業としている業者は一つもないのが現状です。ジオパーク認定は、村の観光産業を生み出すチャンスと捉え、みんなで成功事例をつくろうと動き始めました」。

今後は村の観光拠点として尻屋崎に案内所を設け、ガイドが駐在していつでも案内できる体制づくりを進めます。また、土産品や観光ルートを開発し、収益性を高めることが目標です。訪れた人がほっと一息つける喫茶店を設置するほか、観光ガイドの養成も行う計画です。

「2億3千万年前の地層によってできている、東通の美しい景勝地。素晴らしいものをいかに保護し次世代に伝えて行くか、まずは、魅力的な観光地として、東通村に多くの人を呼び寄せたい」と氣仙会長は話してくれました。

観光客にジオパークの解説をする氣仙会長(右)

村内で元気に活動する人を紹介!

クローズアップ

こんにちは元気さん

元気さん

東通村 禅定山法林寺(ぜんじょうざんほうりんじ) 住職

三國(みくに) 智紘(ちこう)さん(73歳)

東通村蒲野沢地区にある法林寺。地域の人との交流を大切にしている三國智紘住職から、お話を伺いました。

「お寺は私のものではなく、すべて檀家さんの力によるもの。だからいつでも、自由に使ってくださいと言っているんですよ」。東通村そば街道まつりでお寺を開放し、地元の人と交流を深める三國さん。ストレートな物言いとユニークな人柄で、地域の人たちから慕われています。

法林寺は、東通村初のお寺として1664年に創設。明治時代には寺子屋を開き、先代はむつ市に100年置かれていた東通村役場の村内への移転に力を注ぎました。

三國さんは、先代の意志を継ぎ、38歳で法林寺の19世(19代)住職に。以来、子どもたちや若い人たちのためにお寺を使って欲しいと、地域に開放し、紙芝居、人形劇、座禅などで利用されてきました。「お寺は使って初めて生きるものなんです。ただ当たり前のことをしてきただけですよ」。

畑では無農薬の野菜や果物をたくさん育て、お寺を維持するため尽力してくれた人にプレゼントしています。「カッコイイことを言ってもお寺に人は集まらない。でも例えば、もの凄い美味しい作物を作れば、どうやって作ったんだろうって興味を持ち、人は自然に集まってくるでしょ」と笑顔。

元気の秘訣は「体にゴミを溜めないこと。常に体を動かし、心に何も溜めない。いかに楽しく、いかによろしく生きるかが大切なんです。そして、どんな人も1人では生きていけないから、隣人を愛さなければね」とやさしく説いてくれました。

蒲野沢にある禅定山法林寺

座禅などが行われる本堂

寺子屋跡に建つ石碑

東通小学校 女子バレーボール部

レシーブの練習

東通小学校開校と同時に結成されたのが、女子バレーボール部です。部員は4年生から6年生までの18人。キャプテンの柴崎桜さんは「それぞれ性格の異なるメンバーが、バレーボールとなると一つにまとまり、頑張っています」と話します。

練習は週2日から4日、監督の大島義弘先生、顧問の俵山純一先生をはじめ、教育委員会のスタッフ、校長先生、保護者の方々も指導にあたっています。体育館では、ジョギングや準備運動で体を温めたあと、ダッシュなどで体力づくり。サーブ、レシーブ、スパイクなどの基本から始めて、最後に試合形式のゲームを行っています。

顧問の俵山先生は「限られた時間で効率よくできるよう1人1人に目標を持たせ、何のために今この動きが必要なのか説明し、納得してから取り組んでいます。村内の16の小学校が1つに統合され、広い範囲から子どもたちが集まっているせいか、他の小学校の女子バレーボール部の子どもたちよりも背が高い子どもたちが多くいます。この恵まれた体格を生かし、スパイクやアタックに力を入れ、試合で十分発揮できるよう指導しています」。

指導においては、バドミントンのラケットを使ってスパイクの練習をするなど、大島監督は全国レベルの技術講習会で学んできたことを積極的に取り入れています。

キャプテンの柴崎さんは「バレーボールは、友だちとの仲が深まる楽しいスポーツ。私たちは大会などで優勝できなかったけど、卒業するまでにたくさんのことを後輩に教えたいと思っています。そしていつか優勝して欲しいです」と笑顔。

顧問の俵山先生は「助け合いの心を学べるバレーボールを通じて、勝つことだけでなく礼儀や感謝の気持ちも忘れずにいて欲しい。村で唯一の小学校、東京オリンピックに向けて、夢や希望を持ちながら頑張って欲しい」と話していました。

※取材は今年2月に行いました。

準備運動もしっかり

ネットを使った練習

キャプテンの
しばさき さくら
柴崎　桜さん
（取材時6年）

力強いサーブ

東通小学校 女子バレーボール部の皆さん

東通村各地区の皆さまから心温まる情報をお届けします。

地元の特派員レポート

レポートは今年3月に作成し
写真は特派員が
自ら撮影したものです。

観光と漁業のまちへ

東通村岩屋在住
東通小学校(6年)　大槻（おおつき）　夕凪（ゆな）さん(11歳)

私の生まれ育った岩屋は、津軽海峡に面していて住んでいる人の生活は海に直結しています。今はふのりや、マツモ採りの季節です。夏はウニやアワビ漁が盛んです。漁師さんはイカ釣や定置網漁業をしています。

私たちも小さい頃から海の仕事を手伝ったり、海で遊んだりしています。海を散歩しながら、シーグラス※(私たちはきれい石と呼んでいます)を拾ったりもします。昨年、私が参加した都市部交流で、東京の小学生が岩屋に来た時も、この環境をとても気に入り、泊まっている間、毎日海に行きました。私たちにとっていつもの風景も都市部の人たちには特別な環境であることに気づきました。私の一番の岩屋のおすすめは、私の名前の由来にもなっている、夕日が海に沈む夕凪の風景です!!冬には空気が澄んで北海道が見えることもあります。岩屋が季節ごとに楽しめる海の景色を観光資源として、漁業とともに栄えてほしいです。

夕日

夏の海水浴

海岸に打ち寄せられるシーグラス

岩屋漁港

※ガラスびんなどの破片が波にもまれて角がなくなり、磨りガラス状の小片になったもの。

尻屋は漁業の宝庫

東通村尻屋在住
尻屋地区副会長　駒谷（こまたに）　純一（じゅんいち）さん(63歳)

尻屋は東通村の北東端に位置し、主に漁業を営んでいます。皆さますでにご存じと思いますが、昨年は尻屋埼灯台140周年を迎え、「恋する灯台」にも認定されました。合わせて寒立馬の雄姿もご覧いただきたいと思います。ここ尻屋には全国的に珍しい大きな潮干帯があり、春から初夏には岩のり、ふのり、ウニ、アワビ等が採捕され、昆布拾い、漁船漁業、大型定置網漁業と共に重要な資源となっています。また今年の3月1日、2日に東京で開催された漁業者の甲子園と呼ばれる「第22回全国青年・女性漁業者交流大会」に青森県代表として、我が尻屋漁業研究会が出席し、「半世紀にわたる漁場造成の歩み」を発表しました。今後の更なるご活躍を願うところです。

尻屋では多くの神々を祀っていて、春は岸島神社、淡島神社、秋は八幡神社及び蒼前宮等の祭典が開催され、家内安全、五穀豊穣、商売繁盛、航海安全、大漁満足を祈願し参拝しています。尻屋三餘会の熊野権現様お年越し祝賀芸能会には、東北電力(株)東通原子力発電所の金澤所長もお越しになり、親睦を深めることができました。

尻屋埼灯台

尻屋漁港

岩のり摘み

岩のりの出荷作業中

八幡宮神社

発行

東北電力(株)東通原子力発電所広報課

〒039-4293 青森県下北郡東通村大字白糠字前坂下34番4
TEL0175-46-2225・FAX0175-46-2227

誌名「しおさい」について
★東通村で絶えることなく聞こえる心地よい波の音(しおさい)のように、皆さまの心に末長く心地よく響き続ける広報誌でありたいという思いを込めています。

編集後記

今回の広報誌「しおさい」からページ数を8ページから6ページに変更した代わりに、年間の発行回数を1回から震災以前と同様の2回に増やすことにしました。

これまで以上に東通村の魅力を発信し、皆さまから興味をもっていただけるような誌面構成に努めてまいります。

引き続き、当社広報誌「しおさい」をご愛読くださいますよう、よろしくお願いいたします。

PRINTED WITH SOY INK　植林木
この冊子は、環境にやさしい「植物性大豆油インキ」「植林木」を使用しています。